

白鬚神社所蔵『白鬚神社縁起』註釈(二)

日 高 千 晶

はじめに

このたび滋賀県・白鬚神社蔵『白鬚神社縁起』本文に註釈を付けて発表する事とした。

注解の対象となる資料名は、『神道大系』では『白鬚神社縁起』、白鬚神社のホームページでは『白鬚大明神縁起絵巻』『白鬚社縁起』とある。本稿では「白鬚神社縁起」に従った。

なお、詞書第一段から第六段までの註釈は、「白鬚神社所蔵『白鬚神社縁起』註釈(一)」として「地域文化研究」二九・三〇・三一合併号(梅光学院大学地域文化研究所発行平成二八年九月)に記載している。この註釈(一)に引き続き、白鬚神社が公開している翻刻をテキストにし、語注を加えてゆく。

ただし、本文は、読み易さの便を図って、筆者が適宜、濁点・句読点・送り仮名・ルビを補ったり、漢字の字体を変えたりした事をお断りしておく。

『白鬚神社縁起』は、『神道大系』に翻刻(絵図は影印で紹介)され、つとに知られている。また、翻刻が白鬚神社のホームページ上でも公開されており、『神道大系』の翻刻とは異なる点も多く、興味深い。『白鬚神社縁起』は、その内容が神世から戦国時代に至るまでの長い時代にわたる物語で、説話的奇趣に溢れ、読み物としても優れている。加えて、処々に神仏習合思想が反映していて、宗教学的・民俗学的にも深い関心を集めてよいものである。

なお、本稿後半部の注で、『江源武鑑』を参照したとおぼしい箇所を多く指摘した『江源武鑑』は、天文六年(一五三七)から元和九年(一六二三)までの佐々木六角氏の動向を日記形式に綴った書物であり、沢田源内が六角氏の嫡系である事を示すために史実をまじえながら創作した偽書としての疑いが強く、江州の怪奇的な出来事等も記されている。しかし、『江源武鑑』は、偽書と見られながらも元和から延享にかけて、度々重版された書物であ

る。『白鬚神社縁起』の筆者の一人で、『江源武鑑』の記事を詞書に用いたとおぼしい藤原俊清（末尾補記）を含め、書き手達が、当時、世に流通していた『江源武鑑』を手元において、その内容を縁起の本文にとりこんだとしても何ら不思議はない。

本稿の註釈においては、『白鬚神社縁起』を近世期に記された説話文学として捉え、その個々の記事がどのような先行文献の影響を踏まえて書かれたのか検討を試みたまでであり、『江源武鑑』に記述されている史実性をあげつらい、それを無批判に参考にしたらしい『白鬚神社縁起』の文学的価値を貶める意図は決してない事をご理解頂きたい。

このたび、『白鬚神社縁起』を最後まで読み進めるにあたり、近世の江州における歴史的背景を感じ取れた事に加え、白鬚神社信仰を近世文学・宗教学・民俗学を踏まえた様々な視点から検討する益を得る事ができた。

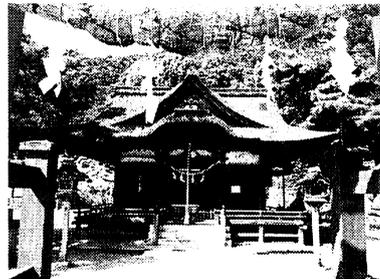
本註釈を通して、『白鬚神社縁起』が学界において一層の関心を集める事を期待すると同時に、将来、猿田彦研究及び白鬚神社信仰研究に裨益される事を願う。

最後に、註釈に取り掛かるにあたり、ご支援頂いた白鬚神社宮司・高橋敬一氏に厚くお礼申し上げます。そして、長期に渡り、様々な面からお導きくださった本学の倉本昭先生に心より感謝したい。

← 白鬚神社湖中大鳥居



← 白鬚神社拜殿



← 白鬚神社本殿



1 現存の版本は、元和七年版、明暦一年版、延享五年版のほか、刊年不明のものが確認されている。

白鬚神社所蔵『白鬚神社縁起』注釈(二)

(詞書第六段)

聖武天皇 東大寺を建立いたし、一丈六尺なる盧遮那仏の銅像をつくらせ給ふに、此時、我國いまだ黄金なかりしゆへ、帝、僧正、良辨に和、勅、金峯山は、其地皆黄金也。金剛藏王ばさちに祈り、金をもとめ、銅像の落をたすけよ。とみことりのし給ふゆへ、僧正、彼山に登、祈念し給ふに、金剛玉、夢中に、此山の黄金は、弥勒出世の時、大地にしかむ為なれば、みづからほしまゝにしがたし。江州、湖の南の勢多といふ所に、一の山あり。汝、彼にいたり持念せば、必黄金を得む。と告給ふにまかせて、勢多に趣きぬるに、老翁一人、巨石のうへに座して釣たるあり。其のかた凡人とみへざりければ、僧正、何人と尋られしに、我は此山の主、比良明神也。此地は如意輪觀音靈應の地ぞなり。爰にて祈念せば、汝が願、はやく成就すべし、と告て、たちまちみへずなりぬ。其石の傍に、草の、廬をむすび、觀音の像を安置す。石山寺是也。かゝして程なく陸奥國より、金を貢調に奉りし。是しあししながら王の擁護、觀音の靈應のみに限らず。當社明神も加

- 2 付表にて、「白鬚大明神縁起卷」三三三三「非物語集」東大寺要録「元章釋書」石山寺縁起「石山物語」本朝高僧傳の比較を記す。
- 3 推古の大仏にて知られる東大寺大仏殿の仏像。
- 4 推古三年(六二四)に僧正の統制のため中國の「僧正」に倣い、「僧正」「僧都」加えて武明天皇二年(六三三)に、社頭(後の律師)の三つの僧職が置かれた。これ僧綱といふ。僧正はその第一等号、奈良時代に僧綱所が兼律師に、そして平安遷都後は西寺に設けられ、それと執務を行つたが、後に名号職の名もつた。
- 5 華嚴宗の僧、聖武天皇の命により東大寺建立に力を注ぐ。仏敎完成後、少僧都となり、翌年、盧舍那佛像完成に伴い、寺務を司る初代東大寺司となす。更に僧階の改正にも尽力。宝龜四年(七三二)に僧正となる。
- 6 奈良東の吉野山から山上へ丘までの連峰。
- 7 「落版」とあるのが本来であつたらう。
- 8 滋賀県大津市の瀬田川付近。
- 9 現在の加藤山。
- 10 祈り等を降げる事に対して、神仏が応え返してくれる現象。
- 11 草庵を設けて念持仏を安置した。
- 12 滋賀県大津市にある寺、良辨が開山、聖徳太子が所蔵していたと伝わる如意輪觀音像を祀る。
- 13 大日本仏教全書 第一一七冊「寺社叢書第一」所収「石山寺縁起」巻一には、本尊は二臂の如意輪六寸の金銅の像、聖徳太子、玉の御本尊云々。丈六の尊像を造て、其御所に彼お像をまつてまゐる。左右に脇士あり。左は金剛藏、右は執金剛なり」とある。

助のちからをそへ給ふゆへ也。さればこそ、明神も人に福をさづければ、大田神と名付と告給ふらぬ。有難き事にあらずや。此時の事にや、中納言家持卿の哥に皇の御代さかへむと東なる陸奥山にこかね花さくとなむよまれし、古萬葉集に入。

(詞書第七段)

又、いつの時にか現形し給ひけん。比叡山横川にも明神釣垂岩とあり。亦もとより社の前にも巨石ありて、其釣垂し時、坐し給ふ跡と、今にのこり。

一比良山



一比良明神影向石



- 14 「神字大鑑 論説編五」伊勢神道(上)所収「伊勢 所皇太神宮御鎮座傳記」神記第一には「復爲生氣」授與壽延之故、名大田神。高馬反魂魂之故、號與玉神とある。
- 15 同文首編「古今神事類編(上)」所収「古今神事類編」巻二(下)第四「所皇太神宮」には「御名モカハラ太田命トス。是猶田彦ノ神ノ面額ト宜フ故」とある。
- 16 大伴家持。
- 17 「万葉集」巻一八には「須賀宮伎能御代密延年等阿頭麻奈流美知能夜麻爾金花佐久」とある。(テキストは岩波書店「契沖全東第一巻」所収「万葉集」による)
- 18 「天本和抄抄」巻三(三)部一四(念)には「みちのよりほはめて金をまらさせたりける時」との詞書に続き皇の御代さかへんとあつまるみちのくにこかね花さく」とある。
- 19 「詞林采葉抄」第三には「皇の御世さかへんと東なるみちの山のまき花さく」とある。
- 20 「歌林良材集」下「奥州金花事」には「すめまきの御代さかへんに金花さく」とある。
- 21 比叡山延暦寺の横川中流、もしくはその界隈を指す。横川中流は嘉祥元年(八四八)に觀音堂として慈覺大師門により開かれ、慈覺大師作の聖觀世音菩薩が本尊。
- 22 老翁として現れた小比叡明神と最澄が出会った時、石山寺には、比良明神影向石として伝えられている。
- 23 「神道全書」神皇正統記九「百」所収「吉吉山」神代知新記「隆慶時代」には、志賀浦津釣垂岩爲地主、釋尊曰我此所弘佛法如何、翁答曰、我久主此地、我自一壽六千歲時、今見本尊爲慈覺、爲佛法結契、則吾無所可釋尊將歸、會業師善遊自東方來告曰、我自人壽一萬歲時爲此地主、彼老翁爲我、我何惜之、今獻釋尊尊爲佛法流布之相、相約已而東西各去、翁者白鬚明神也」とある。

白鬚神社所蔵『白鬚神社縁起』註釈(一)

江州の諸社に、源氏の系圖をかきおさめたまひし。徳大寺内府公維公、其頃は權大納言にて、いませしにかかめ給て、當社におさめたまひぬ。諸社の威力むなしからず。武士の八十氏のたかくわかれゆけど、其源の氏、千五百秋のすえまてたえやらしと、まことにあふきても、なをあまりあることにこそ。

(詞書第十二段)

武將の歸宗のみならず、ちかきころ、當國をしる佐々木家にも、わきて當社を恭敬せり。天文九年、管領義賢、そのかみ五十鈴の川より影響のことをおもひてに

テ多賀生嶋山玉置等へ奉納ラル。日吉之社三納ルハ白野大納言兼、竹生嶋へ納ルハ藤原兼家、白鬚社へ納ルハ徳大寺権大納言、多賀之社二納メテ、右兼家玉置ヲ御系圖末世ノ爲ニ日記ニス。當家利系圖奉納多賀社。當人玉置百七代今上皇御代。既而利之正統殿及斷絶ヲ義昭高時甚欲立其先祖。靈名以納神社所祈天下再興也。(系圖云) 右將軍御系圖ヲ染ラレテ天下再興ノ御祈ヲ四社ニ納メラル。日吉藤竹生嶋多賀何モ同事ナリ。何ニ依テ天下再興ヲ祈リ玉置ノ先祖ヲ改テ書寫シテ納メ祈ル上ニ事ヲ聞クニ、御當家ノ中興韓氏親天皇創ニ此御アリトナリ、依之將軍如此ト云々。後世ノタメニ將軍家ノ御代々庶流マテ一子ヲ殘御本書ノコトク日記ニトムとある。

39 徳大寺家、五代当主、美道の死後、久我より徳大寺家の養子となり跡目を継ぐ。永祿三年(一五〇〇)から長きわたり惟納言を務める。後奈良天皇と正親天皇に仕えたり。

40 数が多し事を示す。八十氏と「宇治川」をかけ、仕々武官や文官が多い事を指す。
「万葉集」巻一「藤原宮之役民作歌」には「八御知之、吾大王、高麗、日之皇子、荒妙乃、藤原我、字倍尔、食國乎、實、佐、高所知武等、神長柄、所念奈、一、天地、毛、縁、而、有、皆、勢、志、後、海、乃、國、之、衣、手、能、田、上、山、之、真、佐、物、乃、布、形、八、十、氏、流、其、取、和、人、民、毛、身、多、奈、知、自、物、水、不、浮、而、吾、作、日、之、御、爾、不、知、國、依、巨、勢、使、我、等、世、也、吹、車、御、留、留、神、樂、毛、新、代、登、泉、乃、河、持、越、流、真、木、乃、節、摩、手、百、不、足、五、十、日、水、乃、作、須、眞、久、見、者、神、隨、乃、之、也。」(キリストは岩波書店『奥神全集第七巻』所収「後代臣記」による)。

41 「かたぐ」だろう。
「源大系」神注編「三」近江國」所収「白鬚神社縁起」には「ま、」とある。

42 永遠。
43 神仏等に纏る事。
44 宇多源氏親成頼を祖とする近江源氏。

45 謙遜な気持ちで敬う事。
46 「江源武鑑」卷二「天文九六月三日の記には「當國白大明神宮營ノ義被仰付、津田權内高光奉行ノ二九日の記には「白鬚」社ノカミニ伊勢ノ御社ヲウツテ、晦日ニ地ナラシメテ、白鬚ノ岩ト云ハ此所ナリ」とある。

47 附近江州の守護大名六角義賢、親善寺城の城主。白鬚は、本来、將軍に次ぎ執政を担う役職であるが、この時代江州の最高権力者に近く、義賢と義兄弟である細川晴元が務めたとされている。また、義賢の父である頼朝は、足利義満の加賀役となる等、當國の代任である「當國代」となっている。ただし、ここで「白鬚」は、領地を支配・つかさどることの意味である。

や、社の上に伊勢の内外宮をたて、側に天の巖戸をうつし、亦、八幡・賀茂・高良三社をも造りぬ。八幡・賀茂は源家のたとむべき神明、高良又、竹内宿禰とて、三百餘歳のよはひをたもちし人なればにや。

(詞書第十三段)

廿二年二月先妣の爲とて、石佛の阿弥陀四十八昧を彫刻して、社近き所にをく。今、其前に庵あり、攝取庵と名付く。

(詞書第十四段)

廿三年、後冷泉院、永承四年に、天下の神社に佛舍利一粒宛納むといへる舊記を見て、江陽の神社を點檢せしに、さばかりの社にも、多くは失待りて、日吉、白鬚など、

「色葉字類抄」には「白鬚ツカサトルクワリヤウ」とある。(キリストは風聞書房『葉字類抄研究並びに索引』による)。
「太平記」卷六「赤坂合戦事付人見本間操傳」には「捕此一兩年方間、和泉・河内ヲ管領シテ、若ノ兵糧ヲ取リ人ヲ檢ク、兵糧モ無左右職マシ」とある。
48 三重県志摩郡御船町にある石佛。須佐男命の重要な遺精に腹を立てて、失照大神が姿を隠した場所と云われる。(キリストは岩波書店『日本古典文学大系』版による)。
49 武内宿禰、景天皇、成務天皇、仲哀天皇、応聖天皇、仁徳天皇に仕えたとする。没年は書物によつて様々であるが、何れも長生きした人物として描かれている。
「風土記」巻八(近江國)「武内宿禰」には「因幡國風土記云、難波高津宮、徳天皇(伯耆)五十五年春二月、大臣武内宿禰、御歳三百六餘歳、當國御下向、於龜倉奴履、御歸所不知」とある。(キリストは岩波書店『日本古典文学大系』版による)。
50 大系、版による。
51 亡母。
52 第七〇代天皇の後冷泉天皇。在位は寶徳二年(一〇四五)〜治暦四年(一〇六八)。
53 「史料紀略」卷二「永承四年一〇月五日の記には「諸國ノ神社ニ、佛舍利各一粒ヲ奉納ス」とある。

「江源武鑑」卷五「天文三年九月一五日の記には「屋形舊記見字曰ク、永承四年三月佛舍利一粒ヲ天下ノ神社ニ納ルナリ。江陽御社ノ神主ツツネナルベキトテ使問ヲ所々社ニタテ玉置ニ納記ノコトク納メテ、廿八日吉社白鬚社須江神社八幡社佐木社比叡社勢多社賀多社江北天明社御木多田社藤原社津津河社合十三箇所ナリ。此外大社多々無シ。屋形舊記日ノ斷絶スル事ヲ歌テ代々新傳ノ佛舍利一粒ヲ各社等ニ納メ玉置。總ツ形ハ昔日ノ輪ノナキ事ヲ歌テ何事トイヘ共知此」とある。
54 滋賀県大津市にある日吉神社、日持神社、山手神社の総本宮。

わづか十三社ならでは残り待らざりしとなむ。貞太内敷信よりことおこりながらも
數百歳を経るまで、せざる、誠に希有の事とぞ。

(詞書第十五段)

佐々木氏領する比は、度々の造營ありしに、彼家衰微せしかば、そのづからあれ行
しに、慶長八年、淺井備前守長政女此神を渴仰、あらたに造立して舊觀に復しぬ。い
まの御社也。

(詞書第十六段)

往貴、明神のもたせ給へる鉢、社の前にありしが、をのづから往還の船にそひて、
勸進せしに、いつの時にか、大津より海津へ行船にそひ行くに、今はさぐべき物な
し。大津へゆかむ折、必まいらすべし、と申てさりぬ。かくして、大津へもどる折
例のごとく鉢うき来りければ、鉢にあまるほど奉才を施しぬれど、いかなるゆへに
や、沈みもやらず、立ちあがりてつきそひしに、船人、かほども奉るに、猶あき
たらせ給はぬか、と嘲り、あまつさへ竿をもて鉢をつき、きのけしに、大津へもどると
おもへど、露ばかりも立さらで、其傍の石につなぎとめたらむやうにて、一七日を

55 原文未確認ゆえ、赤詳としておく。

56 「神道大系」神社編三「近江国」所収「白鬚神社縁起」には「口太」とある。

57 天皇が神仏を信仰する事。

58 「源氏物語」卷一八「慶長三年の記」には「大鏡聖像ヤフシテ今年ヲコトヘイ合テ今年白鬚明神ノ宮
秀頼公拜立其外所々ノ社頭建立アリ」とある。

59 淺井長政の長女・茶々。母は、織田信長の妹。お市の元、豊臣秀吉の側室となり、文禄二年(一五九三)
に秀頼を産む。

60 元々の姿。

61 「朝神神託」には比良山曾神験無方也。兼孝仙道又行飛鉢法。来大津船此鉢不去。挾少水手。頭厭此鉢。
以来一鉢置鉢上。此鉢飛去。在船中後。皆棄相觸。如秋雁。点雲貫。綱子以鉢頂礼。其後未及船。相匠云。
一行神師出来我朝。適見此事謂曰。雖辺土不可不学。有奇取之入」とある。(テキスト岩波書店「日本思想
大系」版による)

62 滋賀県の南西。

63 岐阜県の南西。

64 奉高、神仏をつつしめる事。ここでは、捧げ物・供物を表す。

白鬚神社所蔵『白鬚神社縁起』註釈(一)

經しかば、其巖を七日岩と申す。それにもなをあきたらず給はざりけん、上の谷に、
船を誰おすともなくておしあげ、くだきわれ侍りぬ。其所を船引谷と申程に、今、其
谷の中に、くさりし船板などやうのもの、ほり出すや。是も凡夫の貧賤のごとく
にはあらねど、ふかき利益ある事をかむがみて、かくこらしめ給ふならし。牛羊のま
なごにては、評量しがたき事なり。

(詞書第十七段)

山の後にあたりて、頂法寺と申大伽藍あり。其寺僧、毎歳正月、社のうへの岩上に
坐して、法施を獻す。今に、經岩と名づく。

(詞書第十八段)

をりふしごとに龍灯うかび来り、社の傍の松にうつりて、内陣にいれば、社内震動
す。まことに靈瑞なり。近き頃もみし人多く、また宮つこ、土器に油を入、よなく
灯をとばし、きゆるをまくにいたす。よのつね曉まで待るに、油をくはえぬど、だれ
かぐともなく、昼夜三日ばかり、消もやらぬ事、あまたうびなり。

藤原重好圖之

(朱印)

65 明神降にあるという事。

66 仏教における「三毒」と呼ばれる煩惱「貪瞋癡」のうち、「貪」は貪欲、「瞋」は怒りを表す。

67 おはかる事。

68 長法等が禁止。比叡山三千坊の一院であつた。嘉祥二年(八四九)創建とされる。天台宗系の寺院と
伝わる。元徳二年(一五七二)に織田信長によって焼打ちされた。以上「滋賀県の地名」(金丸社)による。

69 仏法を説いて、縁を唱ふる事。

70 「江原武鑑」卷四「四年九月三日の記」には「白鬚ノ社鳴動す。依之彼社家輔少輔方より觀音城
へ書上ス」とある。

同巻「一天二年一月三日の記に觀音堂、卷四「天文八年七月二十五日の記に江州津川の宮、卷六「弘治
元年三月二十四日の記に江州八幡宮の社、卷七「弘治元年一月八日の記に前部社、弘治元年一月八日の記
に竹生島の宮、卷九「弘治元年改治四年一月八日の記に清水寺の内陣、卷一〇「永禄五年九月九日の記に苗
鹿社、永禄六年八月二日(一)の記に江北の天神の社、永禄七年五月三日の記に山草尾の社、永禄七年一〇
月九日の記に江州岡山城、卷一「永禄八年一〇月三日の記に上賀茂の社、永禄一〇年八月二十四日の記に
住吉の社、卷四「永禄二年四月四日の記に勢多の社、卷一七「天正四年四月六日の記に京都北野神社、卷
一八「天正一〇年五月二日の記に佐々木神社、慶長九年九月四日の記に佐々木神社が、それぞれ鳴動した
とある。

71 不思議な吉兆。

< 詞書第六段 付表 >

| 白鬚大明神縁起繪巻 | 三宝絵 | 今昔物語集 | 東大寺要録 | 元享釋書二十八寺像志 | 石山寺縁起 | 石山物語 | 本朝高僧傳 |
|--------------------------|-------------------------------------|--|------------------|---------------------|------------------------|---|------------|
| ※一丈六尺 | | | | 一十有六丈 | 十六丈 | | 十六丈 |
| 此時、我國いた黄金なかりしゆへ | 此国モト金ナクシテヌカリザルニアハズ。／我国金ナクシテ此願ナリガタシ。 | 此ノ國ニ本ヨリ金無し。 | 即歎此國無金。／我國無金不能塗。 | 此時本朝未有黄金 | 我朝に黄金なきによりて | 此時いまだ、日本國に、きんといふもの、なかりしかば。 | 此時本朝乏金 |
| 金剛藏王、夢中に | | 夢ニ僧來テ、告テ云ク | 藏王示云 | 夢藏王告白 | 藏王夢につげ給く | | 師祈金剛藏王得金栽像 |
| 弥勒出世の時、大地にしかむ為なれば | 此山ノ金ハ弥勒ノ世ニ用ルベシ。 | 此ノ山ノ金ハ、弥勒菩薩ノ預ケ給ヘレバ、弥勒ノ出世ノ時ナム可弘キ | 當來彌勒出世之時。此金可用。 | 此山黄金不敢自恣也 | 慈尊出世の時。大地にしかむかためなり。 | みろくぶつ、出世したまふとき、地にしくべき金なり。 | 此山黄金我不敢恣也。 |
| 江州、湖の南の勢多 | 近江ノ国志賀郡 | 近江ノ國、志賀ノ郡、田上ト云フ所ノ近江ノ國ノ勢田ニ行テ、南ニ指テ楢崎ト云ウ所 | 近江國志賀郡。 | 近州湖西勢多 | 近江國志賀の郡水海の岸の南 | あふみの國、志賀のこほり | 江州湖西勢多県 |
| 如意輪觀音靈応の地そかし | | | | 如意輪觀自在靈應之地也／此地觀音之靈区 | 大聖垂迹の地なり。 | くわんをん、れい□うの地あり。／くわんをんれいをうの地なり。 | 觀音靈應之地 |
| 老翁一人、巨石のうへに座して釣たるゝあり。 | 昔、翁ノ居テ釣セシ石アリ。 | 昔シ、釣リセシ翁ノ定メ居ケル石有リ。 | 河邊巖上有漁翁。 | 老翁座大石上釣魚 | 一人の老翁岩ほの上にして釣をたれしにあへり。 | せいがんにそふて、つりをたるる、おきなあり。 | 老翁坐大石釣。 |
| — | | 七日七夜祈り申スニ | | | | 此石上に座して、くわん音の御名をとなへ、きせいをふかくなし、ほんべらば、七日のうちに、そのきずい、あらはるべしと、のたまひて。 | |
| 其のかたち凡人とみへさりければ | | | | | | 此おきなありさま、けたかく、いかめしくして。ただの人とは見え給はざれば。 | |
| 我は此山の主、比良明神也。 | | | | 我是山主比良明神也 | 我は又常山の地主比良明神也 | 比良の明神とも、又、白ひげの明神とも申□り。 | 翁日、比良明神。 |
| 二百八万余歳のさきにも(詞書第二段より) | | | | | | 人寿六千歳のむかしより | |
| 吾此湖の三度桑原となれるをみし(詞書第四段より) | | | | | | このみづうみの、七度まで | |
| たちまちみへすなりぬ | | | | | かきけすやうにうせにけり。 | | 言訖即隱。 |
| 陸奥 | | 陸奥ノ國・下野ノ國 | 陸奥國 | 奥州 | 陸奥國 | 是より奥州に、小野という山あり。 | |

※石山寺の丈六本尊と混乱している。

△詞書第六段 付表▽使用テキスト一覧（テキスト中のルビは省略）

にした。

日高 千晶（ひたかちあき）大学院博士後期課程在学

・『三宝絵』新日本古典文学大系版『三宝絵 注好選』平成九年岩波書店

・『今昔物語集』日本古典文学大系版『今昔物語集 三』昭和四〇年第三刷 岩波書店

・『東大寺要録』昭和一九年全国書房

・『元享釋書』新訂増補国司史大系三二 昭和五年 吉川弘文館

・『石山寺縁起』大日本仏教全書一一七 寺誌叢書一 昭和五五年（覆刻）名著普及会

・『石山物語』（明曆刊本）室町時代物語大成二 昭和四九年 角川書店

・『本朝高僧傳』大日本仏教全書一〇二『本朝高僧傳第一』昭和五九年（覆刻版第二刷）名著普及会

補記

〔藤原俊清〕

・元禄一七年 三八 參議從三位 左大辨。九月廿一任權中納言。元日節會外弁（宣命使。御酒勅使）。條事定執筆。改元定參仕。東照宮奉幣使。

・寶永二年 三九 權中納言從正三位 正月一日着陣。二月一日爲賀茂傳奏。元日節會外弁。

『公卿補任』第四篇（新訂増補国司史大系 昭和五年 吉川弘文館）を参考